

**NPO法人つげの会平成26年度
地域資源を活かしたまちづくり現地研修報告
～関宿、伊賀上野、常滑～**

猪瀬典夫

NPO法人つげの会では、事業活動の一つである“まちづくり活動及びその支援”の取組みに一環として、会員のまちづくり活動への知見を広めるために、現地研修会を開催している。

平成26年度は、「地域資源を活かしたまちづくり」をテーマに、10月23日から24日に、井上浩行理事長の出身地である三重県伊賀市を中心に、そこへの行程の前後で、三重県亀山市の関宿、愛知県常滑市において実施した。

以下、現地研修会の行程順に、各地でのまちづくり活動の状況、また、今後の課題などについて報告する。

1. 関宿：町並み保存とまちづくり

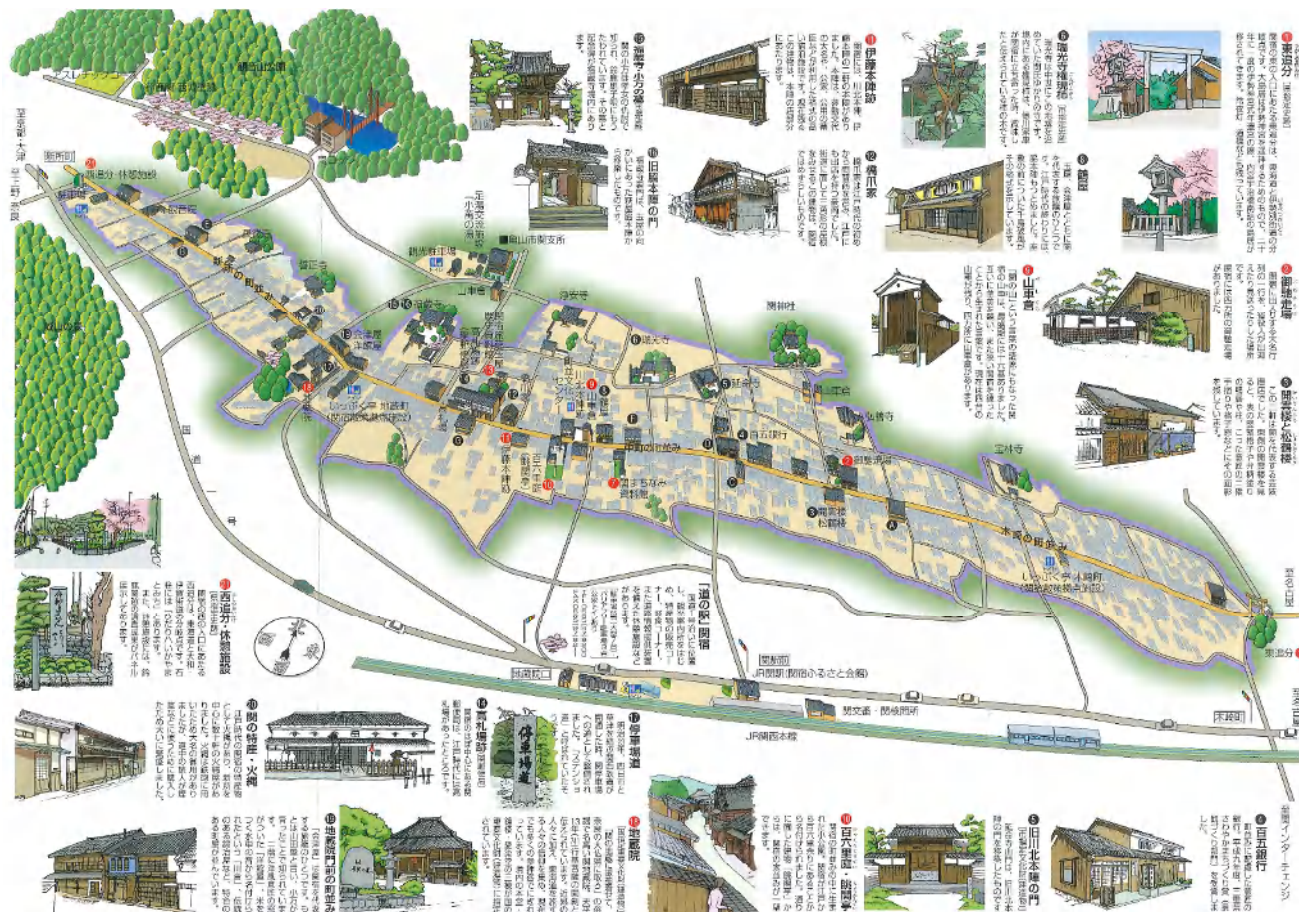
関宿は、旧東海道の宿場町の中で、歴史的な

町並みが残っており、昭和59年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

関宿の範囲は東の追分と西の追分間の約1.8km、25haに及び、江戸時代から明治時代に建てられた古い町家200軒あまりが残っている。



関宿の夏祭りに出る山車が『関の山』の語源となったと言われており、山車が立派であったことから、「これ以上のものはない」という意味で使われるようになった。また、山車が街道筋



[※1]

の建物の屋根ぎりぎりを通る様子から、これが目一杯という意味で語源とする説もある。



一方、江戸時代の五街道と言われる大街道は、一般的に道幅六間(約11m)であるが、関宿では三間程度と、東海道としては狭い。関宿は、古代から交通の要衝であり、古代三関の一つ「伊勢鈴鹿関」が置かれたことから、古くから宿場町としての道幅と町家形成が維持されているのかもしれない。また、鈴鹿川の北側段丘上に形成されており、河川の氾濫域を回避した宿場形成を図ったことも想定される。

伝統的建造物を対象とした修理事業や、伝統的建造物群と調和した修景事業への補助などにより、優れた町並み環境が保持されており、町屋の特徴を残す旅籠の空間構成、意匠・仕上げ・部材など、建築単体としても数多くの魅力を有している。



町並みに配慮して整備された銀行や、郵便受けやエアコンの室外機カバーなど、歴史的環境形成への取り組みが多面的に図られている。



関宿の町並み及び歴史的な環境資源は、極めて魅力的であり、観光誘客資源としての積極的な活用も想定される。

亀山市商業活性化調査研究報告書(平成23年策定)などの行政計画においても、地域住民や観光客のニーズに応える近隣商業地区として、地域住民の生活を支えるとともに、地域の観光資源を活用するなど、地域住民や観光客に対応できる商業地を目指し、文化と暮らしの香り高い関宿にふさわしい商店づくりにより、関宿の魅力を高めると方向づけられている。

しかし、観光目的の商業施設の立地は少なく、そのことが、町並みの安定的雰囲気保持につながっている面もあると思われる。また、地域サービスとしての商業立地も限定的であり、生業としての経済活動が成立困難なことも想定される。全体的には、住機能を中心とする生活の場として歴史的町並みが維持されている。

遊休民家における商業利用の効果的な誘発とともに、生活支援の場・公共的利用としての活用なども含め、まちづくり活動の具体的な展開の中で、固有の貴重な文化的資源の保全と継承への取り組みが求められる。



2. 伊賀市：城下町のまちづくり

平成16年11月に上野市・阿山郡伊賀町・島ヶ原村・阿山町・大山田村・名賀郡青山町が合併して伊賀市が発足した。

今回は、その中心市街地である伊賀上野（旧上野市）で現地研修を行った。

上野城は、戦国時代の筒井氏の城郭遺構に、築城の名手として名高い藤堂高虎の縄張りにより築城され、全国有数の高さを誇る石垣や堀の遺構が残る。大阪夏の陣後、藤堂高虎は、交通の利便性が良い津城を本城、上野城を支城とした。徳川秀忠が発令した一国一城令のもとでも、津城が伊勢国、上野城が伊賀国ということで、藤堂家の領地の中で2か所の城が存続することになった全国的にも珍しいものである。



現在立地している上野城の復興天守閣は、天守台（藤堂高虎による5層大天守閣は、竣工直前に暴風雨で倒壊後、再建されず）に、昭和10年に3層3階の模擬天守として完成した。その復興は、衆議院議員であった川崎克氏が私財を投じて行われたものであり、「攻防策戦の城は滅ぶ時あるも、文化産業の城は人類生活のあらん限り不滅である」との理想をもとに、「伊賀文化産業城」と命名された。



また、城跡一帯の上野公園内には、松尾芭蕉を祀る俳聖殿（昭和17年完成、設計：伊東忠太）や芭蕉翁記念館、伊賀流忍者博物館があり、伊賀上野の観光地として利用され、各種イベントなどが行われている。

復興天守とともに、俳聖殿も川崎克氏が私費をもって建設したものである。

現在の全国のまちづくりの現場における長期のデフレ経済下での投資意欲の減退や変革気運の低下など、参画と改変の誘発が大きな課題である。川崎克氏のような先人の功績は、財力とともに、伊賀上野の歴史と文化に対するリスペクトと継承に対する情念的な献身の心によるものと思う。財力はなくとも、地域への献身の心を持って取り組みたいものである。



伊賀上野は、支城の城下町でありながら、歴史的空間・建築物をととても大切にまちづくりが行われている。上野城周辺の公共施設による歴史的景観形成など城下町としての地域の誇りとともに、観光散策などに対応した環境形成への配慮など、魅力的まちである。



伊賀上野の市街地外周部においても、路地空間を有する歴史的集落景観や旧小田小学校など、良好な環境資源を有している。



上野天神祭は、400年以上の歴史のある祭りで、国の住用無形民俗文化財に指定されており、宵宮祭、足揃の儀、本祭など、10月23日から25日の3日間行われている。9基のだんじりと百数十体の鬼行列が城下町を練り歩く豪華絢爛の祭事である。



中心市街地の9町会が有する「しるし」と「だ

んじり」には、それぞれ見事な彫刻や刺繍を施した天幕・前幕・水引幕・胴幕・後幕などで飾られている。



このような見事な祭事が継承されているのは、誇り高き城下町における町衆の財力と気概によるものと思うが、江戸時代の一時的中断はあったものの、伊賀上野の歴史と文化の伝承への取り組みに敬服するものである。

中心市街地の活性化が経済活動などを中心に議論・検討されることが多いが、地域の祭事などの維持・継承などの文化的側面からも活性化に意義がある。

伊賀上野の歴史的・文化的魅力は、支城の城下町として役割以上の資源が形成・残存している。このような地域資源魅力は、古来より都（飛鳥、奈良、京都など）や伊勢を結ぶ奈良街道・伊賀街道・初瀬街道を有するの交通の要衝としての地理的優位性と、江戸時代の藤堂家城下町や伊勢神宮への参宮者の宿場町としての機能が付加されてことにより醸成された。

また、それら地域資源魅力を継承する伊賀上野の人々のプライドに敬意を表する。

③. 地方都市における住宅ストックを考える

住宅・土地統計調査によると平成20年の全国の空き家数は約757万戸（空き家率13.1%）で、住宅総数の増加率を上回る伸びを示しており、平成32年には1000万戸の大台に到達し、住宅総数に占める空き家率は15%を超えると予想されている。[※2]

空き家問題については、老朽化などによる倒壊や建材の飛散の危険や、無居住による防犯面での課題などが指摘され、足立区（足立区老朽家屋等の適正管理に関する条例）などでの撤去勧告・命令や公的資金による建物の解体工事費の援助への対応が行われている。

今回の現地研修会で訪問した伊賀上野の井上理事長の実家は、理事長兄弟の首都圏での独立生計後、両親の介護帰省などを通じて継続的に土地建物の良好な維持管理が行われている。

理事長ご夫妻は介護帰省から二地域居住のような形態で生活されてきたが、ご両親のが亡くなり、ご自身の老後などを考えると家・屋敷の維持管理と有効活用について検討が必要とのご

指摘があった。



まちづくり事業としての係わりであれば、良好な庭・建物を活用し、飲食機能の導入を図りと思うが、・・・。

不良住宅・建物の空き家問題への対応については、「空家等対策の推進に関する特別措置法」の創設など、今後、具体的な対策について創意工夫による取り組みが展開されると思われる。

しかし、井上理事長宅のような愛着と見事な維持管理による良好な住宅ストックをいかに地域資源として保持・活用するかということも、地域づくりにおける重要テーマである。

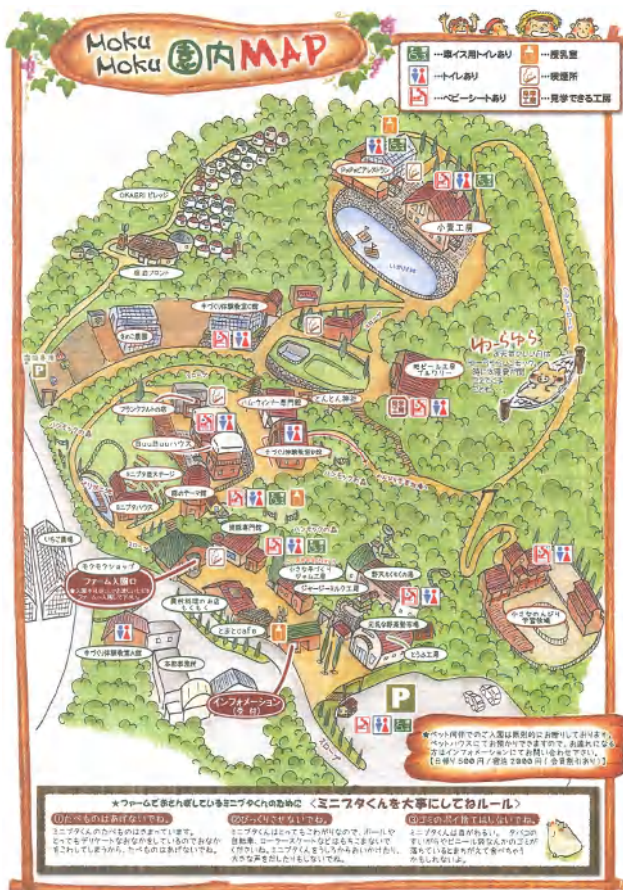


4. 農業の価値創造：伊賀の里モクモク手づくりファーム

農業生産の担い手育成、農地の多機能性への配慮も含めた農地活用、食糧自給率の低い日本、ＴＴＰ交渉など国際社内の中で、存立基盤の再構築や国内外において競争力の向上力が求められる農業。

そのような中で、伊賀の里モクモク手づくりファームは、地域産業・地域経済における自立的経営体として輝き、農業の明るい未来を示してくれているように感じた。

伊賀の里モクモク手づくりファームは、株式会社の農業生産法人であり、昭和62年に設立、資本金3800万円、従業員数は役員7名、社員140名、パート160名、アルバイト600名、年商48億円（平成23年）の企業体である。〔※3〕



〔※4〕

伊賀の里モクモク手づくりファームの取り組みは、伊賀豚のブランド化からの取り組みから始まり、6次産業化（1次産業×2次産業×3

次産業）による農業生産者による地域経済の活性化のためのビジネスモデルの創造として注目されている。そのビジネスモデルとして、次のような特徴があり、今後の農村振興などにおける有意義な先進事例である。

- 伊賀豚のブランド化における生産・加工・販売の一体化による販路拡充
- 体験教室の開催による消費者とのコミュニケーション機会の創出と取り組み方針の浸透



- 農業公園構想による事業の多角化と生産者と消費者、地域住民のふれあいの場づくり、一大テーマパークとしての魅力形成
- ファーム・通信販売・レストラン・加工直売所などによる複合的事業モデルの構築



- 会員制（モクモクネイチャークラブ、入会金2,000円・年会費無料、2年以内に利用の場合自動更新）の導入による根強いファンの組織化とリピーターづくり
- モクモク通信、場内の案内サイン・環境演出、POP、生産者情報やトレイサビリティ等の情報発信力 など



5. 常滑市：地場産業とまちづくり

常滑での焼き物生産は、平安時代末期から始まり、日本六古窯（瀬戸焼、常滑焼、越前焼、信楽焼、丹波立杭焼、備前焼）の一つである。

常滑では、さまざまな焼物が生産されてきたが江戸時代には急須が有名で、明治時代には土管の生産、そしてフランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルに採用されたスクラッチタイルやテラコッタなどの建築陶器など、地場産業として各時代に応じた生産活動が行われてきた。

そのような常滑にあって、古常滑から現代の作家の作品が展示されるとともに、陶芸家を目指す人々の研修施設として機能しているのが「とこなめ陶の森」陶芸研究所である。

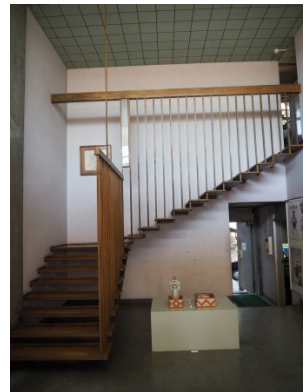
この施設は、明治大学建築学科開設の立役者である堀口捨巳先生が明治大学教授在任中に設計し、昭和36年に竣工したものである。



遠景のプロポーショナルは、堀口先生設計の明治大学生田図書館を彷彿とさせるが、施設建設の寄付者である伊奈製陶のモザイクタイルによ

る薄紫色のグラデーションで表現されており、陶器研究所らしい製品と繊細な職人技のコラボレーションでもある。

軒の深い庇の線の美しさ、軒裏の小梁、応接室横の茶室など、堀口先生の作品性が随所に保持されている。耐震性能の課題はあるようだが、非常時の避難誘導による安全性の確保に努めるなどの考え方で、堀口作品を愛護する施設管理担当者に敬意を表する。



焼物のまち常滑では、時代の変化とともに生産対象が変化し、また生産の場も盛衰・変化し

てきた。しかし、数百年という歴史の中で、焼物は常滑を代表・象徴する産業であり、それらが織りなす風景が常滑らしさを表徴している。

常滑の生産現場、生産遺構、作品の数々、製品の思い出など、線・面として常滑の産業観光を満喫できる「常滑やきもの散歩道」は、常滑の街なかの原風景となっている。



〔※5〕



◇◇出典・参考資料など◇◇

- ※1：東海道五十三次の内“関宿”イラスト案内図（亀山市民文化部）
- ※2：空き家問題（牧野知弘著、祥伝社新書）
- ※3：地域の美味しいものづくり（独立行政法人中小企業基盤整備機構編、発行：同友館）
- ※4：MOKUMOKU 園内 MAP：（伊賀の里モクモク手づくりファーム作成、裏面には、イベント情報や体験教室などのスケジュールを掲載）
- ※5：常滑やきもの散歩道マップ（常滑市観光協会常滑支部）